

七尾城史資料館

七尾城は、日本の優れた山城のひとつで、1577年に武将・上杉謙信（1530～1578年）の軍勢の手に落ちるまで、占領される可能性はほとんどないと考えられていました。七尾城は、15世紀から16世紀にかけて186年間能登半島を統治した畠山家が、16世紀初めに築いたものです。

七尾城跡の下の方の山にあるこの資料館は、城跡の敷地から発掘されたものを展示しています。

この建物の正面には、丸の中に水平な線が2本引かれた、畠山家の家紋が飾られています。この資料館は2階建てです。1階には大画面があり、七尾城が16世紀にはどのような姿だったと考えられるかを描いたコンピュータグラフィックスを上映しています。この映像は、英語または日本語で観ることができます。訪れた人は、この映像から、山の複数の尾根をわたる街のような、七尾城の壮大な規模をよりよく理解できます。

大きな絵は、畠山家が最も隆盛だった1544年に、山のふもとにあった町がどのような姿だったと思われるかを描いたものです。考古学的な発見に基づく詳細な絵は、16世紀の一般の町人の暮らしに対する知見を与えてくれます。この資料館の2階には、14世紀から16世紀の焼物、漆器、工芸品などが展示されています。

七尾城史資料館は、午前9時から午後5時まで開館しています。（月曜日はお休みです。）